



平成 19 年度特別展

東京ミッドタウン前史

赤坂檜町の三万年 ～旧石器～長州藩下屋敷～歩兵第一連隊～

「赤坂檜町」、こう記してもそれがどこであるかがすぐに分かる人は、現在では少数派ではないでしょうか。しかし「東京ミッドタウン」と聞けば、多くの人はその場所をよく知っていることでしょう。今や東京の新名所となった「東京ミッドタウン」のある場所の旧町名、それが「赤坂檜町」なのです。

21 世紀の幕開けとともに始まった防衛庁跡地再開発事業は、7 年の歳月を経て新しい街「東京ミッドタウン」として、平成 19 年 3 月 30 日にオープンし、ちょうど 1 年を迎えました。地下 5 階・地上 54 階・高さ 248m の都内で最も高い超高層ビルを中心に、130 の商業施設やホテル等を利用するために、オープン以来連日多くの人々が訪れています。しかし、この敷地におよそ 3 万年の歴史が刻まれていることを知る人

はあまり多くありません。

開発に先駆けて東京都埋蔵文化財センターによって行われた発掘調査では、ナイフ形石器が出土しました。この石器が出土した地層から、およそ 3 万年前の旧石器時代のものであることが明らかとなりました。後に「赤坂檜町」となるこの場所の歴史は、ここからスタートしたのです。

今年度の特別展は、「赤坂檜町」を舞台に、この土地に刻み込まれた歴史を採り上げました。中心となるのは、江戸時代の長州藩毛利家屋敷の時代です。毛利家の屋敷は、ヒノキがたくさんあったことから「檜屋敷」の別名があり、「檜町」の名はここから採られたのです。都内最高層ビルの足元に刻まれた 3 万年の歴史を紹介します。

発掘調査で分かる「赤坂檜町」

松本 健
(学芸員)

東京ミッドタウン建設に先駆け防衛庁跡地の発掘調査が東京都埋蔵文化財センターによって行われたのは、平成14年4月から翌年7月までの間でした。発掘調査面積は47,469㎡で、「萩藩毛利家屋敷跡遺跡」の名が示すように、調査は江戸時代の大名屋敷跡を主たる対象としていました。

毛利家屋敷に関係する遺構は5000基ほど確認されていますが、建物の遺構と思われるものは少なく、残されている屋敷絵図に記されているような建物と遺構の対比は行うことができませんでした。これは最も大きな建物である表御殿部分が近代以降の土地利用により大きく削平されていることから、その遺構が残されていないことが大きな要因ですが、遺構が検出された区画にあったその他の毛利家屋敷の建物が礎石などを持たない小規模で質素な建造物であった可能性にもその原因を求めることができます。

毛利家屋敷跡の遺構に見られる特徴は、遺構の年代に明確な画期が認められない点です。江戸の大名屋敷としては珍しく、大きな火災による全面的な屋敷の建て替えが行われておらず、部分的な建物の建て替えで済んでいたことが要因ですが、さらにいわゆる「ゴミ穴」から出土する遺物についても、場合によっては1世紀の時間幅を持つ陶磁器などが出土していることもその要因といえます。

検出された遺構の中には、四辺にかわらけを並べ、金・銀の永楽通寶と「輪宝」を埋納したものがあります。「輪宝」は真言密教の地鎮具であり、その形は数種ありますが、出土したものは建物造営に対する「安泰」を祈願する際に使われるもので、この遺構が屋敷地の地鎮めを行った後で使用した品を埋納した遺構であり、その時期は、毛利家がこの土地を拝領した寛永13年(1636)から、上屋敷の改修のためこの屋敷に

長期滞在を始めた正保4年(1647)までの間に行われたものである可能性が高いことがわかりました。

遺物は、長州の特産品である萩焼と赤間硯がまとまって出土していることが他の大名屋敷跡にはない特徴となっています。萩焼はこれまで江戸の遺跡からはあまり多く出土していません。また赤間硯の量も他の遺跡に比べ豊富な量となっています。こうしたことは、国許と江戸屋敷との間の密接な繋がりを示しています。

近世以前では、古墳時代の竪穴住居跡が10軒出土したことも注目されます。江戸時代の屋敷造成時に大規模な削平が行われていることから、本来はより多くの住居からなる大集落であったと推測されます。港区ではこのような集落の跡が発見されたのは初めてで、古墳時代前期の港区の姿を伝える貴重な発見となっています。大きな河川がなく、稲作の適地である低湿地が少ない港区にあって、この台地上の集落の人々は、北から北東にかけて広がる赤坂の低地を生産の基盤として、比較的豊かな暮らしをしていたのかもしれませんが。さらに特筆すべきことは、旧石器時代のナイフ形石器の発見でした。関東ローム層中の立川ローム第Ⅶ層から発見されたこの石器は、今からおおよそ3万年前の遺物であり、港区の区域にこの時代にすでに人類が生活していたことが明らかとなりました。これまでは白金台や赤坂で発見されたおおよそ1万2千年～1万7千年前の石器剥片が港区最古の遺物でしたが、この発見により港区の歴史は一举に1万年以上も遡ることとなったのです。

「東京ミッドタウン」建設によって、3万年の歴史を伝える地層は失われましたが、調査によって多くの事実が記録として残され、歴史の復元に役立っています。

麻布龍土植物場

～茶園になった長州藩麻布下屋敷跡～

吉崎 雅規

(文化財保護調査員)

今回の特別展「赤坂檜町の三万年」は、東京ミッドタウンの敷地の歴史を、旧石器時代から現在まで通史的に紹介する展覧会です。江戸時代には長州藩下屋敷が、明治以降は陸軍歩兵第一連隊・防衛庁が置かれたため、この土地の歴史を物語る資料は豊富で、江戸時代以降の変遷はほぼ途切れることなく知ることができます。

しかし、屋敷地が幕府に没収され「火除空地」^{ひよけあきち}（防火のための空地）となった元治元年（1864）から明治新政府の軍用地となる明治4年（1871）までの7年間は、実はこれまで土地利用のありかたがよくわかっていませんでした。屋敷内の建造物は没収時に徹底的に破却され、幕末・明治初期の切絵図でも敷地が空白となっていることから、この土地は歩兵第一連隊の兵舎が建築されるまでは何もない空地であったと考えられてきたのです。

しかし、今回の特別展にあたって調査をおこなった結果、国立公文書館の所蔵する3通の古文書から、この時期の土地利用のありかたに関する新たな情報が得られたので、ここで紹介します。

慶応2年（1866）5月、屋敷跡は幕府勘定所^{かんじょうしょ}の管理下に移されます。そして同年8月に勘定奉行・小栗政寧^{まさやす}から老中にあてた上申書に「元毛利大膳^{だいにん}（長州藩）の土地、現在は御勘定所^{おかんじょうしょ}の植物場になり」と書かれており、この土地が「植物場」となっていたことがはじめてわかったのです。この植物場は屋敷前面の町名を採って「麻布龍土植物場」と呼ばれます。

同じ年の11月頃、勘定所は植物場内にあった樹木・石を売り払います。勘定奉行の上申書には「幕府の「御用」に立つ樹木等をのぞいて、屋敷内の樹木・石をすべて取り払う予定で入札をおこない、結果1371両で売却することにした」とあります。

ここで気になるのが、屋敷のシンボルだった檜のゆくえです。この上申書には売り払った木と、幕府が利用するために売却をひかえた木の種類が記されていますが、「檜」の文字は見当たりませんでした。しかし、売却する樹木のリストの中に檜によく似た木である「榎」^{さくら}という種を見出すことができます。上申書には「すべて」樹木を取り払う予定と記していることから、檜は売却リストの「榎」に含まれており、このときに伐採された、という推測も成り立ちます。

屋敷跡の利用形態がわかる3通目の史料は、慶応3年3月、勘定奉行・小栗上野介^{こうずけのすけ ただまさ}（忠順）の上申書です。この史料からは「麻布龍土植物場」に「茶実」を蒔きつけたこと、勘定方の長島新之助なる男を、おそらく管理のためにこの土地に常駐させたことがわかります。幕府は植物場に茶の種を蒔いて茶園にしようとしていたのです。

明治元年（1868）12月、新政府は薬園・植物御用地の調査をおこなって、東京府の所管に移します。この調査でリストアップされた25ヶ所の中に「麻布龍土植物場」（3万3587坪）が含まれていました。注記で「慶応2年に植物場茶園となり、後に（茶が）繁茂したときは（茶を）直接製造するつもり」と書かれており、逆にこのことから、茶は「繁茂」するほどには成長していなかったことがうかがえます（この段落の記述は『東京市史稿』による）。

以上によって、長州藩下屋敷没収から歩兵第一連隊の兵営となるまで、地図上でも時間上でも「空白」となっていたこの土地の具体的な様子がわかったのです。国立公文書館の古文書はこの期間の様子を示す重要な史料として特別展でも紹介しますので、ぜひご覧ください。

江戸屋敷に葺かれた石見瓦

毎田佳奈子
(文化財保護調査員)

石見瓦^{いわみがわら}は、現在の島根県西部から中部に位置する石見国で製作された瓦です。瓦に残された年号から、少なくとも文化年間（1804～18年）には焼かれていたことが知られています。石見瓦の特徴は茶褐色の釉薬^{きまぢ}が掛けられている点で、この釉薬は当地で産出される凝灰岩系の来待^{きまち}石を原料としています。現存する江戸から明治時代の建物の屋根は赤茶やこげ茶の斑模様を成すことから分かるように、釉薬の発色には自然の濃淡があったようです（写真1）。

区内では南麻布5丁目の石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡で石見瓦が出土しました。文献調査によるとこの地は17世紀前半から19世紀前半まで亀井家中屋敷でしたが、敷地の約2割の発掘調査を終了した時点で整理箱約4箱分の石見瓦が確認されました。胎土の特徴や赤茶・こげ茶色等の釉薬の色調は、生産地である島根県出土の資料に非常に類似しています。また器種では棧瓦が多く確認されました。

これら石見瓦をはじめとする茶色系釉薬の掛かったいわゆる「赤瓦」は、江戸時代、東北の盛岡・仙台・福島、中部の瀬戸・美濃、北陸の能登や加賀、中国の備前、九州の肥後等の日本各地で焼か



写真1 石見瓦の葺かれた櫓建物(部分)
(島根県鹿足郡津和野町内)

れていました。その場所の多くは降雪量の多い寒冷地域であることから、水の浸透・凍結に強い瓦として生産されたと考えられています。また複数の地域で灰色の「いぶし瓦」との併用が

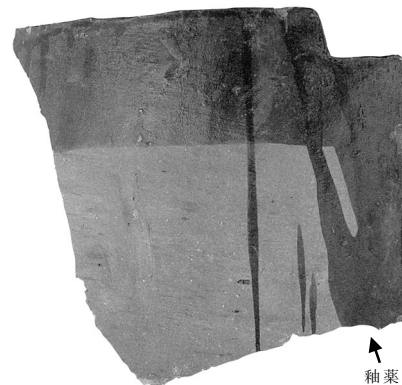


写真2 区内出土の石見瓦

確認されており、赤茶色の色調を意図的に利用したとも言われています。中国の朱子学等を教える儒教系の藩校、例えば岡山藩閑谷学校では中国風として赤瓦を葺いています。名古屋城三の丸の儒教式の霊廟でも使用が認められ、仙台にある寺社や霊廟では銅版瓦の代用品として使用されました。北陸では寺院の他に町屋の蔵や母屋でも使用されています。このような事例は象徴的な使用と言えるでしょう。

さて話を亀井家の屋敷に戻しましょう。絵画資料によると亀井家の江戸上屋敷では「いぶし瓦」葺き建物に並列する、蔵と思われる建物の屋根に石見瓦が葺かれています。灰色屋根の建物群のなかで石見瓦の赤瓦建物が非常に際立っています。上述によると、この上屋敷の石見瓦も意図的な使用であると考えられます。

中屋敷跡である当遺跡では複数の建物や塀の跡が検出されており、それらの建材として瓦の使用が想定されています。どのような建物にどう使われたかは現時点で明らかになっていませんが、瓦の出土比率から亀井家中屋敷は灰色の建物群の中に赤茶色がひと際目立つ建物があったと考えられます。それは上屋敷の風景にも似た風景だったのでしょう。

亀塚の謎(前編)

杉本 絵美
(文化財保護調査員)

皆さんは「亀塚」という名前を聞いて、どんな塚を思い浮かべますか？

江戸時代のはじめ亀塚は済海寺の境内にありましたが、正保4年(1647)、隣地の土岐家に境内の南側が分け与えられ、亀塚の地も土岐家下屋敷の拝領地になりました。江戸時代から亀塚の存在は知られており、地誌等にその名を見ることができます。江戸時代の人々は亀塚をどのような存在と見ていたのでしょうか。

享保20年(1735)に出版された『続江戸砂子』では亀塚について次のように言っています。

古老の云、むかし晴天なる時は小亀多く塚中より出たりしと也。

また寛延3年(1750)、上野沼田藩藩主である土岐頼熙は屋敷内にあった塚に亀山碑という石碑を建てています。その内容を見ると、亀塚は平安時代に書かれた『更級日記』に見える「竹芝寺」の伝説地で、また太田道灌が斥候を置き「河図」と呼ばれた場所であると述べています。さらに、「亀塚の山頂にある酒壺から出てきた亀を神として祀っていたが、ある風雨の夜に酒壺が石と化した」という言い伝えがあると碑には刻まれています。



亀山碑
(現在も亀塚上に残されています)

18世紀後半に津村淙庵が編纂した『譚海』では、竹芝寺の伝説に出てくる酒壺を埋めた場所が亀塚(瓶塚)であるという説を紹介していますし、『江戸名所図会』(天保7年<1836>完成)でも亀塚を霊亀の栖む地としているように、江戸時代の亀塚は竹芝寺や亀にまつわる伝説の地として知られていたことがわかります。

一方、亀塚の由来を竹芝寺や霊亀と関連付けることに否定的な説もあります。17世紀後半から18世紀前半にかけて書かれた『紫の一本』という江戸の地誌は、庚塚(庚申信仰により作られた塚)を誤って亀井塚、亀塚と呼ぶようになったと言っています。また、19世紀前半に編纂された『御府内備考続編』や『新編武蔵風土記稿』には、夜中に航海する船の為に済海寺境内にあった亀塚に常夜灯が設置されていたことが記されています。

しかしながら当時の人々が亀塚を霊亀の栖む地、霊地とみなしていた事は確かなようで、亀塚東側の崖下にある御田八幡神社には亀塚に参詣した古記録が残っているそうです。また、現在は亀塚公園から聖坂をやや下った場所に位置する亀塚稲荷神社は、江戸時代には亀塚上にあり、塚に棲んでいた霊亀が化したとされる石を祀っています。

明治時代に入ると、坪井正五郎氏によって亀塚は近代的な手法による研究が行われます。さらに亀塚が築造された時期・性格を明らかにするため、昭和45・46年に慶應義塾大学が、平成15・17・18年には港区教育委員会が発掘調査を行いました。

今回は、発掘調査によって亀塚についてどのような事がわかったのかをお伝えします。

(後編へ続く)

梅が茶屋

平田 秀勝
(文化財保護調査員)

まだ肌寒い2月から3月にかけて、小さいながらも、香り高い花を咲かせ、我々の目を楽しませてくれる梅は、早春を彩る代表的な花の一つです。古来より桜とともに人気が高く、江戸時代、亀戸の梅屋敷や亀戸天満宮、向島の花屋敷（現在の百花園）などが梅の名所として広く知られていましたが、港区内にもそれらと並び、多くの名所記にその名を連ねる梅の名所として「梅が茶屋」がありました。

梅が茶屋は^{さんこうざか}三光坂（白金二丁目と四丁目の間を南へ上る坂）の下、現在の白金二丁目に鎮座する白金氷川神社の東隣にあった茶屋です。『文政町方書上』によると、元は白金村の村民・八郎右衛門が開いた茶見世で、文政11年(1828)当時は忠兵衛という者が営業していたそうです。茶見世を開いた土地に1本の梅の木があり、いつの頃から、^{ゆぎょうしやうにん}遊行上人（時宗の総本山遊行寺の住職）・^{た あいっかい}他阿一海がこの地を訪れ、梅の花の美しさを賞して一首の和歌を詠んだことから、自然と梅が茶屋と呼ばれるようになったとあります。

『江戸名所図会』は、挿絵とともに、

梅が茶屋

^{さんこうざか}三光坂（三光坂）より左の方、^{しろかね}白銀（白金）氷川の社の側にあり、^{ひととせ}一年遊行上人五十二世他阿一海^{このや}此人の梅を^{あいし}愛たまひ一種の和歌を詠せらる^{えい}白梅にして床梅と号くといふ、二月の^{ぶんほう}芬芳すこふる世に越て高し

と載せ、また、『江戸名所花暦』には、

^{うめかちや}宇米茶屋
^{さんこうざか}麻布三子阪（三光坂・三光坂と同）にあり、^{ひとえ}一重の白梅なり、正月下旬 寒暖によるべし盛りなり、外よりハ遅し、古木なり、遊行

（遊行上人）他阿一海上人このうめに題して歌あり

この花の色は白かね名に高く
千歳をこめてみのるとこうめ

と見えます。これらの記述から、梅が茶屋の梅は、床梅と呼ばれる白梅の古木で、旧暦の1月下旬頃から2月に、盛りを迎えたことがうかがえます。三光坂下には、江戸時代より白金氷川神社をはじめ多くの寺社があり、梅が茶屋には、梅花見物のほか、参詣や物見遊山の人々も多く訪れたことでしょう。しかし、『新撰東京名所図会』によると、江戸名所の一つとして名高かった梅が茶屋も、明治時代にはすでに絶えており、当時を思い起こさせるものは、『江戸名所図会』の挿絵のみであったようです。



梅が茶屋（『江戸名所図会』より）

今回紹介した「梅が茶屋」をはじめ、白金の地理・歴史を集録した『増補港区近代沿革図集 高輪・白金・港南・台場』が刊行されます。平成20年4月以降、本館並びにみなと図書館、港区役所3階区政資料室、各支所で頒布（頒布価格1,800円）の予定です。

資料館講座「港区を読もう!『半七捕物帳』と港区」 時代小説ブームを考える

清田 和美

(港区立生涯学習センター所長)

「半七捕物帳」に描かれた港区

出版界では、著名作家の時代小説の復刻版が刊行されています。書店を覗くと、時代小説コーナーの特設売り場が用意され、大仏次郎を始め、海音寺潮五郎、吉川英治等々の時代小説が売り場を賑わしています。テレビや映画でも時代劇は静かなブームとなっているようです。

港区ゆかりの作家・岡本綺堂の代表作である『半七捕物帳』も、時代小説の名著の一つです。

六十九の短編（六十八という説もあります）で構成され、数多くの作品で港区内の地域が描かれています。今回の郷土資料館講座では、その中から以下の3つの作品を選びました。

- (1) 愛宕から新橋を描いた「湯屋の二階」
- (2) 高輪を描いた「熊の死骸」
- (3) 麻布・赤坂を描いた「夜叉神堂」

(1)の「湯屋の二階」の舞台である「湯屋」は現代の銭湯にあたりますが、いまの銭湯とだいぶ様子が異なっています。かつては、庶民の交流の場・娯楽の場として欠かせない場所であり、その構造も違っていることが分かります。

(2)の「熊の死骸」では、実際にあった、青山権田原から出火し麻布・高輪まで延焼した大火災を下敷きにして作品を創作しています。作家の創造力のたくましさを感じさせる作品です。

(3)の「夜叉神堂」は、麻布 筈 町の長谷寺を舞台にし、江戸庶民の娯楽でもあった開帳を取り上げるとともに、民間信仰に頼る人々の姿をいきいきと描いています。

いずれの作品も、江戸時代末期を時代的な背景としています。また、すっかり様子が変わってしまった地域を舞台にしており、すでに失われた事物や風俗が描かれてもいるわけですが、綺堂の作品は、わかりやすい文章で、丁寧に情

景や江戸情緒を書き込んでいるため、読者は、スーっと「江戸」に引き込まれていきます。当時の様相を思い描くには、絶好の教科書だといえるでしょう。

なぜ、時代小説か

ところで、いま、なぜ、時代小説が世の中に受け入れられているのでしょうか。

私は、時代設定・歴史的背景やストーリー展開の巧みさだけでなく、たくましく生きる庶民の生活やかれらの知恵が作品の重要な要素だと思います。

どの作品を読んでも、「人」同士のつながりが大切にされています。そこに生活している人々が、お互いに協力し合い、助け合いながら力強く生きているところに共感を覚えます。

最近、「江戸しぐさ」が注目され、本も出版されて人気があるようですが、相手へのさりげない気配りの動作は、時代小説のあちこちに散りばめられています。これらは現代生活にも通じるもので、たとえば「傘かしげ」「腰浮かせ」などといったちょっとした日常の動作で、人同士のつながりを円滑にすることができるでしょう。

また、「物」を大切にする姿勢にも気づかされます。壊れた道具を修理して大切に使ったり、着物を最後まで使い切る姿は、現代の私たちが忘れてきている習慣で、まさに頭が下がる思いがします。

いずれも、江戸庶民が快く暮らしを営むために、ごく自然になされている行動です。こういった江戸庶民の暮らしのあり様が、時代小説には、いきいきと再現されており、読書を通じて再認識・再確認し、共感する—これが時代小説人気の要因ではないかと思います。

事業予定

特別展

東京ミッドタウン前史 赤坂檜町の三万年

旧石器～長州藩下屋敷～歩兵第一連隊

平成 20 年 3 月 11 日（火）～4 月 13 日（日）

休館日：毎週月曜日、3 月 19 日（水）

※期間中、毎週金曜日は 19：45 まで開館

※4 月 14 日（月）～4 月 25 日（金）の期間は、展示替のため、休館します。

常設展 館蔵資料展 4 月 26 日（土）～9 月 30 日（火）

各学芸員がおすすめる館蔵資料を紹介します。

コーナー展 「新収蔵資料展

ー平成 19 年度受け入れ資料ー

4 月 26 日（土）～6 月 14 日（土）

※6 月 16 日（月）～30 日（月）の期間は、特別整理期間のため、休館します。

コーナー展 館蔵資料展

江戸往還図絵巻（複製）を展示します。

7 月 1 日（火）～7 月 16 日（水）

コーナー展 「東京タワーと港区（仮）」

7 月 18 日（金）～9 月 30 日（火）

このほか、資料館講座、古文書教室や、小・中学校の夏休み期間中には、夏休み学習会・体験ミュージアムを行う予定です。詳細は、『広報みなと』または資料館ホームページをご覧ください。

刊行予定の出版物

展覧会図録の他にも、港区の歴史に関する本や研究紀要を出版しています。平成 20 年 3 月末に刊行予定の 3 冊をご紹介します。

頒布開始日等はお問い合わせください。

①増補 港区近代沿革図集

高輪・白金・港南・台場

江戸時代から現在までの沿革図を掲載し、地域の解説を収録した、利用範囲の広い一冊。昭和 47 年に発刊された「港区沿革図集 高輪・白金・港南」に、新たに台場地区の地図、昭和 22 年・昭和 60 年代と近年の地図を加え、町名や坂・橋等の名称の説明には最新の情報を反映した増補版です。（頒布予定価格 1,800 円）

②増補 写された港区 四（赤坂地区編）

明治、大正、昭和に撮影された港区内の写真と、現代の写真と対比させ、文学作品等の一節を収載する人気シリーズの、増補改訂版・第四集です。（頒布価格未定）

③研究紀要 10

港区にかかわる考古・歴史・民俗などの論考や、資料解説を収載。郷土資料館の重要な活動のひとつである、調査研究の成果です。（頒布予定価格 1,000 円）

事業報告（平成 19 年 10 月～平成 20 年 2 月）

- ① テーマ展 「港区名所図会」（平成 19 年 4 月 20 日～10 月 17 日）
- ② テーマ展 「平成 18 年度 新収蔵資料展」（平成 19 年 10 月 19 日～平成 20 年 2 月 23 日）
- ③ コーナー展「寄贈資料展 ー暮らしの道具ー」（平成 19 年 9 月 15 日～12 月 14 日）
- ④ コーナー展「平成 19 年度指定文化財展」（平成 19 年 12 月 15 日～平成 20 年 1 月 16 日）
- ⑤ コーナー展「発掘速報展ー平成 18 年度の調査ー」（平成 20 年 1 月 18 日～2 月 23 日）
- ⑥ 資料館講座「港区を読もう！ー『半七捕物帳』と港区ー」全 3 回（平成 19 年 12 月 4 日、11 日、18 日）

港区立港郷土資料館の利用案内

交通 JR 田町駅より徒歩 5 分 都営地下鉄三田線・浅草線三田駅より徒歩 2 分
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩 1 分 港区コミュニティバス（ちいばす）
「田町駅前」停留所下車徒歩 1 分 「田町駅西口」停留所下車徒歩 3 分

開館時間 9：00～17：00

休館日 日曜日・祝日・第 3 木曜日
年末年始・特別整理期間

入場料 無料

※7/21～8/31 は日曜日・祝日も開館します。



『資料館だより』61 号

平成 20 年（2008）3 月 1 日発行

編集・発行 港区立港郷土資料館

〒108-0014 東京都港区芝 5-28-4

Tel03(3452)4966 Fax03(5476)6369

ホームページ

<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/>

刊行物発行番号 19073-7541